

NAKAYA UKICHIRO  
MUSEUM OF  
SNOW AND ICE

発行 / 中谷宇吉郎 雪の科学館

〒922-04 石川県加賀市潮津町イ106番地  
TEL. 07617-5-3323 FAX 07617-5-8088

## ご 挨拶

11月1日、加賀市に「中谷宇吉郎 雪の科学館」が誕生します。

中谷宇吉郎(1900-1962)は、加賀市片山津出身の物理学者で、世界で初めて人工雪の作成に成功し、雪や氷の研究分野を開拓した「雪博士」です。また、「冬の華」などの随筆や「霜の花」などの科学映画を通じて、科学の魅力を伝えた先駆者でもあります。

当館は、中谷宇吉郎の科学的業績や芸術・生活や人物像を紹介し、雪と氷の科学の魅力を伝える施設として建設されました。

今日、青少年の科学技術離れが指摘されていますが、当館がこうした時代風潮への積極的解答となるよう、また、加賀市民はもとより、内外の多くの方々から愛される施設になるよう努力していく所存です。みなさまのご指導・ご鞭撻を、お願い申し上げます。

中谷宇吉郎 雪の科学館 開設準備室長 東出 孝信



### プレイベント (7月24日, 市民会館)

雪の科学館のオープン前のプレイベントの「雪と氷の親子実験教室」には約80名が参加し、チンダル像の観察を楽しんだ。プレイベントでは、映画「雪—結晶の観察」、片山津コーラス「雪は天から送られた手紙である」、高田宏氏の講演「冬の花びら」などが行われ、約200名が参加した。



### 雪氷学会 (9月26日~30日)

金沢大工学部で行われ雪氷学会で、2日目の27日に一般公開のシンポジウム「雪の科学と文化」が開かれ、盛況であった。当館の展示専門委員の東 晃氏(雪氷学会会長)と樋口敬二氏(中部大学教授)は、「雪国に文化あり」、「文化史からみた中谷宇吉郎」の題でそれぞれ講演し、中谷宇吉郎と雪の科学館について詳しく紹介した。29日には、「教育・普及セッション」で、準備室の神田健三・見神千絵が「中谷宇吉郎雪の科学館のプレイベントにおける雪氷学の普及」の題で発表した。30日には、雪氷学会のエクスカージョンとして、約25名が当館を訪れ、中島町にある中谷宇吉郎のお墓参りも行った。

### 小松左京氏講演

(11月3日, 市民会館)

文化の日恒例の「市民文化大祭典」で行われる「市民文化講演会」で、今年は雪の科学館の開館を記念し、小松左京氏による「地球に生きる」の題での講演があります。場所は市民会館ですから、間違えないで下さい。



## 目 次

2. 雪の科学館／最新情報
3. 雪の科学館／展示と映像の紹介
4. 国際雪氷委員会と中谷宇吉郎 樋口 敬二
6. 「冬の花びら——雪博士中谷宇吉郎の一生」  
を讀んで 大野 雄也
7. 親切だった中谷先生 田中久一郎
8. 編集後記

## 雪の科学館 最新情報

### 「宇宙の雪」の実験装置

スペースシャトルにのせ、無重力の世界で人工雪の実験を行った装置が、朝日新聞社から貸与され、「雪の結晶」ゾーンに展示されています。

1978年、朝日新聞社が、スペースシャトルでどんな実験をしてみたいか、とアイデアを募集したとき、新潟の高校生のアイデアが採用され、NECが製作を担当し、宇宙で実験された装置です。この募集には17,000人が応募、うち280名が雪の結晶の実験の案を出したといえます。

実験は、5年の準備の後、1983年にケネディ宇宙センターから打ち上げられたチャレンジャー号で行われました。実験は2回行われ、1回目の打ち上げのときには記録用ビデオには何も写りませんでした。しかし2回目には、玉に似た丸い雪の結晶が写り、成功しました。

世界で初めて人工雪を作ることに成功した中谷博士を記念した雪の科学館に、宇宙での人工雪実験装置が展示されるのは、意義深いことです。

また、この装置は、日本のものとしては、宇宙から帰ってきた初めての荷物でもあります。当時までに、日本が独自に打ち上げた人工衛星は26個ありましたが、地球に戻ってきたものはなかったのです。

### 中庭／『グリーンランド氷河の原』庭園

グリーンランドから、10月はじめに50トンほどの岩石が届き、館の中庭に『グリーンランド氷河の原』の庭園が完成しました。

中谷博士は晩年、グリーンランドをしばしば訪れ、



厳しい環境の中で雪や氷の研究に打ち込んできました。東大総長の茅誠司氏は「博士は、グリーンランドと命のやりとりをしたように思われて残念でならない」と書いています。

そのグリーンランドから岩石を採集して庭園を作ろうという構想が、博士の二女の中谷芙二子さんから出され、実現に向けて検討されました。市からは、デンマーク大使館に協力を要請しました。また、芙二子さんを通じて、グリーンランドやアメリカの知人やボランティアの積極的な協力が得られました。そして、この夏、グリーンランドの岩石採集の旅が実現し、採集した岩石が加賀市に届いたのです。

これらの岩石には、氷河擦痕(\*)がついたものもあり、なかには、20億年ほどの古いものがあります。また、岩石の配置により、グリーンランドに沢山あったポリゴン(\*)を再現させています。珍しい岩石の庭園に、人工的に霧を発生させる「霧の彫刻」の幻想的な空間が広がります。

#### 【氷河擦痕(さっこん)】

グリーンランドは、大部分が巨大な氷河(氷冠)で覆われていますが、氷河が流動するとき岩石には擦り傷がつくことがあります。これを氷河擦痕といいます。

#### 【ポリゴン／構造土】

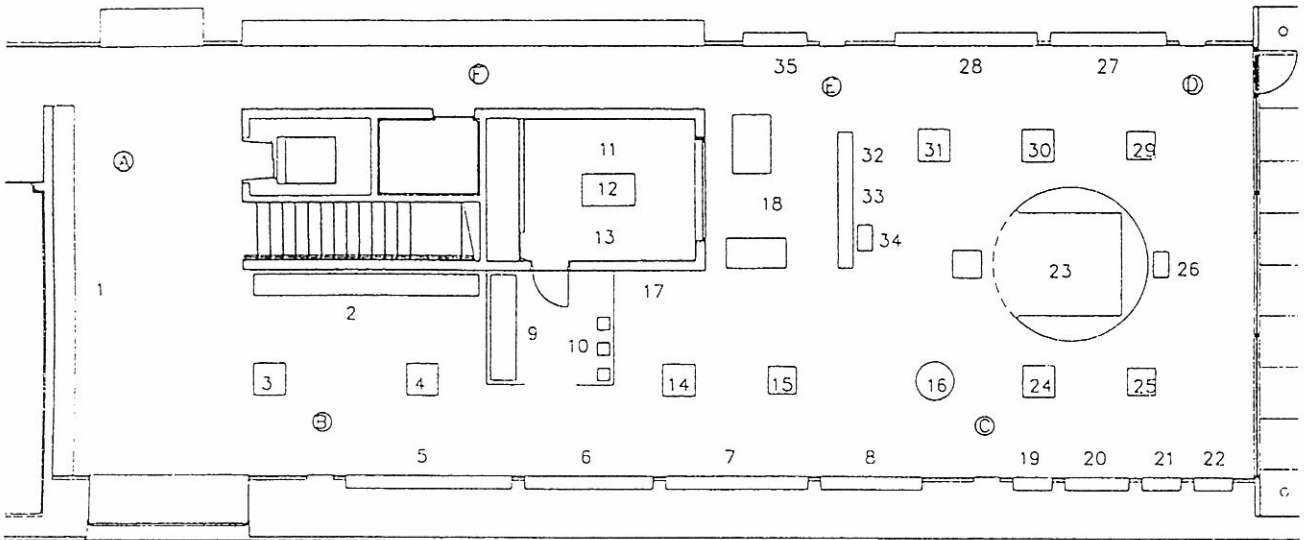
極地や高山の寒冷だが比較的雪の少ない地域では、地面が寒暖の変化にさらされ、凍結・融解が繰り返された結果、岩石が長い年月の間にゆるやかに移動し、多角形や円形などの特徴的な模様ができます。これをポリゴン(構造土)といいます。

# 中谷宇吉郎 雪の科学館 展示と映像の紹介

1階の展示室は、常設展の5つのゾーンと特別展用の1つをあわせて6つのゾーンに分かれ、それぞれのテーマに沿って展示されています。図の番号と下のリストを照合すれば、展示の内容とその位置がわかります。

映像については、2階の映像ホールその他、展示室にもビデオ・モニターが設置されています。

- (A) 「ひととなり」ゾーン
- (B) 「雪の結晶」ゾーン
- (C) 「氷の結晶」ゾーン
- (D) 「グリーンランド・ハワイ」ゾーン
- (E) 「世界の中の宇吉郎」ゾーン
- (F) 特別展示ゾーン



- |  |  |
|--|--|
| <p>(A) 1. 中谷宇吉郎の生涯<br/>2. 森羅万象帳<br/>3. 宇吉郎の住まい<br/>4. 寺田寅彦と宇吉郎</p> <p>(B) 5. 雪の結晶の分類—天然雪の代表的形態<br/>6. 雪の結晶の分類—天然雪の結晶写真<br/>7. 天然雪の観測活動—十勝岳・大雪山<br/>8. 雪の研究の発展—世界の雪・宇宙の雪<br/>9. 雪の研究のプロセス<br/>10. 雪の結晶を立体写真でみてみよう<br/>11. 低温室再現<br/>12. 人工雪装置<br/>13. 人工雪の世界<br/>14. 雪の結晶を観察してみよう<br/>15. 「雪の結晶」映像装置<br/>16. 雪の研究の発展—スペースシャトルの人工雪装置<br/>17. 雪の研究の発展—双晶と低温の結晶<br/>18. 大学にて</p> | <p>(C) 19. 雪氷凍土研究所<br/>20. 氷の内部融解像—チンダル像と空像<br/>21. 氷の結晶の変形<br/>22. 氷結晶変形の研究の発展—X線を使って<br/>23. チンダル像実験<br/>24. 氷の結晶構造模型<br/>25. 「氷の結晶」映像装置<br/>26. アメリカでの生活</p> <p>(D) 27. ハワイの観測活動<br/>28. グリーンランドの観測活動<br/>29. 「グリーンランド」映像装置<br/>30. グリーンランドの石<br/>31. 粘弾性測定装置<br/>32. 極域の雪氷研究の発展—ドームF深層掘削計画<br/>33. 極域の雪氷研究の発展—深層掘削<br/>34. 北極、T3氷島での観測活動</p> <p>(E) 35. 国際会議での活躍</p> |
|--|--|

## ◇映像

2階の映像ホールでは、最新の映像システムで『科学するところ—中谷宇吉郎の世界—』(25分)を定時に上映し、特別上映用ソフトとして「雪の結晶」「窓の霜」も用意しています。

1階の展示室には、ビデオ・モニターが3台(図の15, 25, 29)あって、冬の白峰での雪や氷の観察風景や、グリーンランド上空からの氷河の空撮なども織りまぜて、テーマにあわせて映像をご覧になれます。

## ◇さまざまな実物資料をまじえて中谷博士の人物紹介

「ひととなり」ゾーンには、墨絵・愛用品・ゆかりの品など、さまざまな実物資料をまじえて、博士の科学・芸術・生活を多角的視点から紹介します。

## ◇人工雪装置

博士が世界で初めて成功した、人工雪の装置(12)と低温室(11)の様子を再現させます。また、スペースシャトルに載せた人工雪の装置(16)も展示されています。

## ◇実験コーナー

「チンダル像実験コーナー」(23)では、実験用の特製の氷が用意され、自動的にスライドと声による説明が行われた後、誰でも実験できるシステムになっています。

又、雪の顕微鏡観察(14)、立体鏡による観察(10)等のコーナーもあります。

## ◇特別展示ゾーン

特別展や企画展で使用するスペースです。開館時には、雪の結晶をかたどったガラスの器など特別な実物資料を展示し、「宇吉郎ゆかりの地・ゆかりの人」の企画展示も行います。

# 国際雪氷委員会と中谷宇吉郎

名古屋市科学館館長 樋口 敬二 (\*)

## 【国際雪氷委員会 ICS I の 100 周年】

去る9月14日から16日にかけて、オーストリア西部、チロルで知られる地方にある都市インスブルックにおいて、国際雪氷委員会設立100周年の記念式典、ならびに記念シンポジウムが開かれた。

国際雪氷委員会 (International Commission on Snow and Ice : ICS I) は、次のような関係によって、世界における自然科学研究の推進体制の一部をなしている。自然科学、すなわち、物理学、化学、数学、生物学、地質学、地球物理学など、すべての分野の研究を総括しているのは、国際学術連合会議 (International Council of Scientific Unions : ICSU) であり、その事務局はパリにある。その下に、各分野の組織があり、その一つとして国際測地学地球物理学連合 (International Union of Geodesy and Geophysics : IUGG) があり、国際地球観測年 (IGY)、地球圏-生物圏国際協同研究計画 (IGBP) などを提案している。

その下に、気象学、海洋学、地震学などの組織とともに、国際水文科学協会 (International Association of Hydrological Sciences : IAHS) があって、河川、地下水、雪氷など、水に関する研究を推進しており、その一つとして、国際雪氷委員会 (ICS I) がある。

そのような関係があるため、今回の ICS I 設立100周年の式典に際して、私は、その上部組織である IAHS の副会長として出席したわけである。

ところで、本年を ICS I 設立100周年としたのは、厳密にいうと正しくなく、ICS I の前進である国際氷河委員会 (Commission Internationale des Glaciers) が設立されたのが1894年で、それが1922年、IAHS の発足とともにその一部として ICS I に発展したという事情によって、設立100周年としているのである。

現在の ICS I の委員長は、インスブルック大学の気象学・地球物理学教室の Kuhn 教授であり、1964~67年に ICS I 委員長を勤めた同大学の Hoinkes



写真上：国際会議で、パネルとパンフレットによって、「中谷宇吉郎 雪の科学館」について講演する筆者。

写真下：会場の机に置かれたパネル、写真、パンフレット等の展示。

教授の愛弟子で、二代にわたって委員長をつとめたわけで、100周年の記念事業を主催するには、ぴったりの人物であった。

## 【国際雪氷委員会と中谷宇吉郎】

さて、このような100周年の記念行事に際して、私が、「中谷宇吉郎 雪の科学館」を紹介しようと考えたのは、中谷先生が、1957~60年の間に、IC

(\*) 「中谷宇吉郎 雪の科学館」展示専門委員長、運営委員会副委員長

SIの副委員長をつとめられたという関係があったからである。当時の委員長は、ヨーロッパの指導的立場にあったFinsterwalder教授であった。

そのような私の希望をKuhn教授に伝えたところ、よろこんで、記念式典にひきつづいて開催されたICS I・UNESCO共催の記念シンポジウム「氷河の質量収支：測定と再構成」の2日目、私が座長をするセッションの冒頭に時間をとって、「雪の科学館」を紹介する特別講演の機会をつくってくれた。会場が一つなので、参加者全員がそこに集まるからである。

そこで「雪の科学館」開設準備室主幹の神田健三氏が準備してくれたOHP（中谷先生の写真、館の外観、内部構成など）やパネルを使って、私は、次のような話をした。

#### 【中谷宇吉郎の業績と「雪の科学館」の紹介】

中谷宇吉郎博士は、日本で最も有名な科学者の一人であり、没後30年をこえた今でも多くの人が敬愛し、このたび、出生地である加賀市は、博士を記念して、「中谷宇吉郎 雪の科学館」(Nakaya Ukichiro Museum of Snow and Ice)を建設し、近く開館を迎えようとしている。そこで、この機会に、私の恩師である博士の業績を回顧し、「雪の科学館」の紹介をしたい。

中谷博士は、雪の結晶の研究によって世界的に知られており、参加者の多くは、その著書“Snow Crystals, natural and artificial”を読み、美しい結晶の写真を御記憶のことと思う。

また、中谷博士は、北海道大学低温科学研究所の創設者であり、博士とその門下生の業績によって同研究所は国際的に知られるようになった。

雪氷分野における中谷博士の業績は、多岐にわたっているため、そのすべてを語ることはできないが、このシンポジウムのテーマに即して氷河に関する研究業績をあげると、次のようになる。

まず、1952年から、アラスカのメンデンホール氷河で採取された氷の巨大単結晶を試料として、チンダル像の形成、単結晶の塑性変形に関する実験的研究をおこない、日本の雪氷研究者が氷の研究に向う動機を与えた。

その結果、中谷門下の東 晃博士は調査隊を組織

して、アラスカのメンデンホール氷河における氷の単結晶の形成過程などの研究をおこなった。以来、多くの日本の研究者が氷河研究を進め、その対象は、このシンポジウムで上田豊教授が発表するヒマラヤ、チベットの氷河に及んでいる。

次に、中谷博士は、1957年、国際地球観測年（IGY）の一環としてアメリカが実施したグリーンランド内陸におけるボーリング調査に参加し、採取された試料の物理的解析にあたり、グリーンランド氷床の表層における積雪から氷への移行過程を明らかにしたが、これが博士の最後の業績となった。

このような氷河に関する中谷先生の業績を、先生の写真をOHPで見せつつ述べたあと、「雪の科学館」の外観、展示構成をカラーOHPによって示し、日本に来る機会があったら是非この科学館を訪問されるよう、加賀市の位置を地図で示しつつ、会場の皆さんに招待の言葉を述べて、私の特別講演を終えた。

#### 【「雪の科学館」への期待と関心】

講演のあと、シンポジウム会場の廊下でおこなわれたポスター・セッションの会場の一隅にある机の上に、パネル等を並べて展示するとともに、簡単なパンフレットを自由に取ってゆけるようにして、参加者の関心をさらに高めるようにした。

その結果、反響はたいへん大きく、講演も展示もよかったという声が多く寄せられるとともに、国際雪氷学会（International Glaciological Society：IGS）の機関誌“Ice”の編集長 Omaney 博士から、雪の科学館について写真入りで紹介する寄稿をしてほしいといわれたのはうれしかった。

また、ドイツのReinworth博士のように、中谷先生が参加されたシャモニイの研究会に関連して、芙二子さんのことをおぼえていて、わざわざ“次女”とはっきり呼んで、思い出を語り、雪の科学館を訪れる機会を得たいものだ、といった人もある。

そのほか、イギリスのDavid Collins博士など、日本を訪れたことのある多くの研究者が、加賀市の位置をたずね、訪問を具体的に考えているのが、うれしかった。

こうして、「中谷宇吉郎 雪の科学館」は、国際的舞台上に登場したわけであり、これから、国際的期待に答えられるような発展がのぞまれる。

# 「ふゆのはなびら—

## ゆきはかせ・なかやうきちろうの一生」(\*)をよんで

(愛知県日進市立日進南小学校) 1ねん おおのゆうや

水がない。ほくはかんがえた。ふゆ、山にふったゆきを、人こうてきにひょうがにして、ことしのなつのようなとき、とかしてつかえばいいのに。いまから50年もまえ、おなじようなことをおもいつき、ゆきやおりをしげんとしてつかおうとけんきゅうした人がいた。なかやうきちろうはかせだ。大ゆきはきらわれものだ。なだれがおきたり、こうつうがストップしたり。ゆきおろし、ゆきかきもじかんがかかる。でも、ひがいにばかり目をむけず、ゆきをかけがえのないざいさんと見て、水しげんとしてりようしようとしたのだ。かんがえかたをかえて、ちえをつかえば、このちきゅうにむだなものはない。なかやはかせがゆきとおりのけんきゅうをはじめたのは、はかせのせんせいである、てらだたらひこはかせが、「そのとき、そのばしょでしかできないけんきゅうをしてください。」ということばをおくったからだ。ほっかいどうだいがくのせんせいになって、まどのそとにふりつづくゆきを見ていたとき、このことばがうかんできめたのだ。かがくのすすんでいたがいこくのまねをしないうで、けんきゅうすべきことをみじかにみつけ、じぶんの力だけですすめていくというのは、とてもゆうきのいることだったはずだ。また、しぜんのうつくしきやふしぎさにおどろくころをわすれてはならない。そこから、ほんとうのかがくがうまれるのだからというふたりのはかせのかんがえかたは、ぼくらのじだいにも生きつづけるたいせつなことだ。なかやはかせは、じぶんのめいよのためにけんきゅうしつにこもるがくしゃではなく、じぶんのけんきゅうを、ゆきとともに生きる人たちにやくだてようとする人だった。すくないだんぼうで、あたたかくくらせるいえのせっけいなどもその一つだ。日本というくにが、まだまづしかったじだい、ささくれたせたまっちぼうのき

きというそまつなきぐをつかってけんきゅうし、せかいはつのじんこうゆきのけっしょうをつくることにせいこうしたなかやはかせを、とてもカッコイイとほくはずっとおもっていたけれど、この本をよんで、はかせのかかぐにたいするかんがえかたや、ゆきのがいでこまっている人たちへのおもいやりをして、はかせのかんがえをうけつぐような人になりたいとおもうようになった。そしてなによりも、かがくは、かくへいきなど、たたかいのためのものであってはならないと、つよくおもった。

このなつやすみ、ほくは、11月1日、石川けん・かがしにオープンする、なかやうきちろうゆきのかかぐかんのプレ・イベントにいった。こおりのチンダルぞうのじっけんもやった。この本をかいたひとにもあった。ピシピシ音がする、なんきょくのおおりの入ったむぎちゃものでみた。なかやはかせののこしたゆきのけっしょうのえいを見ながら、ゆきやおりや人げんのちえをつかって、うつくしいちきゅうをとりもどし、まもってみせますと、スクリーンの中のはかせに、やくそくした。



雪の科学館のプレイベント（7月24日）に両親とともに愛知県から参加した大野雄也君。

(\*)「冬の花びら—雪博士・中谷宇吉郎の一生」(高田宏著、偕成社発行)  
高田宏氏は、プレイベントで講演した。

# 親切だった中谷先生

金沢大学名誉教授 田中 久一郎<sup>(\*)</sup>

## 【小松中から北大・物理学科へ】

私は昭和18年に石川県立小松中学校を卒業して専門学校に入学し、終戦の翌年の21年に北大物理に入学した。小松中学からは、北大を昭和10年卒の関戸先生をはじめ、15年卒の孫野さん以下、中谷、和泉、藤岡の諸先輩が中谷教室から卒業しておられた。孫野、藤岡のお二人は理学部や低温科学研究所の教授になられたが既に故人であるのは、残念である。

私は、中学時代に母校にこられた先生の講演を聞いたことや、先生の著書の影響で北大物理に進学したいと思った。そこで、専門学校からでも入試を受けられるかなどを尋ねるため、往復はがきを先生に出した。20年の戦時中のことである。往復はがきにしたのは、専門学校の教授から、必ず返事が貰えるであろうと知恵をつけられたからであるが随分失礼なことをしたものである。しかし、先生からは親切なご返事を頂いた。入試のとき、小松から4日目に札幌に着き、教授室に伺った時、「よく来たね」と言われたのが先生から聞いた最初のことばであるが、中学の後輩が戦後の混乱期にはるばるとやって来たのをほめて貰ったようで嬉しかった。

## 【中谷先生宅でのゼミナール】

3年になって、希望する教授に所属して研究することになった。中谷教室には4人が入ったが、低温科学研究所には物理系の3部門があつて中谷教室の分家のような関係にあつたので、私は吉田教授の部門につき、黒岩さんの下で積雪の電媒常数を測定したりした。この部門には中学の先輩の藤岡さんが助手で居られたので、この部門についたのだと思う。中谷教室の4人としては、先生と直接はなしたいのであるが、お忙しいので仲々その機会が無い。そこで、4人そろって教授室に行き、ゼミナールをやつてほしいと申し入れたところ、都合のよい夜に先生宅に集つて寺田寅彦先生の英文論文集を勉強するという大成果になった。幸い、論文集は理学部と大学付属の両図書館にあつたので借り出し、各自の担当



論文を筆記して発表に備えた。このゼミは23年の夏休み前後に数回やったと思う。第一回のときは、先生が「この論文集は、岩波のおやじが寅彦全集などでもうけさせて貰ったので、500円かの安い値段にしたのだよ」など解説されたり、私が「液面上のフローティング・バーの振動」の論文を担当したときは、「寺田先生の頭のよさを示している論文だ」と言われたり先生独特の解説が長く、また奥様がスイカをお出しになると雑談会になってしまい、ゼミとしてはあまり進まなかったが楽しいものであり、学生に親切だった先生が思い出される。先生のお宅のほか孫野さんの所などにも、たびたびお伺いしてご迷惑をおかけしたが皆様にはよくして頂いた。

## 【佐々木研(科研)とくろしお号】

23年に小松に帰省すると、地方新聞には、24年から発足して新制大学となる金沢大学についての記事が多かった。そこで先生に、卒業したら金沢に行きたいと申し出た。ところが、先生は「金沢へ行ったら君は駄目になるよ」と申され「理研の仁科研究室の佐々木君が一人ほしいと言っているんだ」とのお話であつた。研究にも未熟な私を、安心できる理研に入れた方がよいとの親切だったと思う。理化学研究所は、戦後は理研コンツェルンが解体されて科学研究所と改名され、研究費は研究所員が作らねばな

(\*)「中谷宇吉郎 雪の科学館」展示専門委員、運営委員

らなくなっていたが、北大物理卒の佐々木さんらの科研のグループによる、浜名湖での集魚灯の研究は科学(岩波刊雑誌)の寄書論文としてたびたび発表されていたのを知っていたので、金沢に行って親孝行する決意はどこかに飛んでしまった。佐々木研は井上先生発案の潜水探測機(くろしお号)の重要な仕事を分担したが、中谷先生はこの仕事の総大将ともいうべき立場であったので、進水式や伊東温泉沖での第一回潜水、また私が24年には熱海の漁夫宿舎に住んで集魚灯の実験をやっていたころにもお会いできた。

### 【先生の「寝込みを襲う」】

私は祐天寺に下宿して渋谷駅から山手線で科研に通っていたので、その頃に原宿駅近くに自宅を移されていた先生を訪ねるに好都合で、先生の朝食前にお伺いする方法で、たびたびお会いして頂いた。寝込みを襲うという卑怯な方法であったが、先生は、このくらいならば金沢へやればよかったと思われたかもしれない。しかし、お会いしたため、「君は海中視程を研究しているのだからWoodのPHYSICAL

OPTICSを読み給え」と言われ、800ページのこの本を読むのに日曜も科研に通うというひどいめであった。

### 【親切だった中谷先生】

27年4月におやじが急死したので小松に帰り、31年に漸く金沢大学機械工学科の助手として研究生活に戻ることができたが、研究費が無くて往生していた。33年の秋に上京してお宅に伺ったとき、とつぜん住友ペークライトに行こうと申され、新橋まで電車で行き、本社の中尾技術部長らに紹介され、これから20年以上も援助して頂くことになった。その時、「この男は面白いことをやっているのだ…」などとほめて下さった。私の学位の仕事も、北大物理の先生方に、私の仕事をほめて話されていたそうである。これらは私のための絶大な援護で、他のお弟子さんにも用いられた方法であったと思う。「関戸君は秘蔵子だったんだが仁科先生に頼まれたので理研に出したんだ」と言われたことがある。私など、自分の弟子のことは仲々ほめられないのであるが、先生の親切は心からの思いやりに依ることを痛感している。

## 編集後記

私ども3名(東出・神田・見神)は、本年4月に「中谷宇吉郎 雪の科学館 開設準備室」に配置され、6ヶ月余り、開設準備のために努力してまいりました。私どもの任期はあとわずかであり、11月1日に、改めて人事が発表され、館長以下の配置が決まります。その意味で、開設準備室としての経験について、記録しておきたいこともいくつか思い浮かびましたが、今は開館に向けて最も多忙な時期であり、その余裕がありませんでした。

しかし、樋口敬二先生から国際舞台で中谷宇吉郎の業績と雪の科学館を紹介して下さったご報告を、愛知県の小学1年生の大野雄也君からは「冬の花びら」についてのしっかりした読書感想文を、田中久一郎先生からは中谷博士の思い出の原稿をいただき、開館にあわせて通信第1号を発行させることができました。

開設準備室での喜びの一つは、館の建設を通じて、中谷宇吉郎や雪・氷に関心を持つ人々との交流が、さまざまなかたちで生まれることです。市内・高尾町の山下一枝さんは、母から聞いた話として、宇吉郎が大聖寺の松見家にいた小学生の頃、将棋が強くて、何度やっても(母は)勝てなかった、と思い出を語ってくれました。アメリカのウィスコンシン大学のDaub教授は、科学史の講義で日本の独創的な科学者として中谷宇吉郎を取り上げ、「科学の方法」をテキストにしているとのことですが、津幡の吉田智子さんを通じて、次号への原稿依頼に快諾して下さいました。

「中谷宇吉郎 雪の科学館 通信」は、今後も、中谷宇吉郎に関することや、雪と氷に関することを、多角的視点から紹介し、交流していく場にしていきたいと考えていますので、よろしくお願い致します。

神田 健三